

知事広聴：平太さんと語ろう 発言要旨

日時：平成 22 年 11 月 2 日（火）13:30～15:30

会場：アクシスかつらぎ 多目的ホール

1 出席者

- ・ 伊豆の国市において様々な分野で活躍中の方 6名（男性4名、女性2名）
- ・ 傍聴者 約160名

2 発言意見

No	項 目	県関係部局
1	新規就農者（ニューファーマー）の支援	経済産業部 農業振興課
2	観光と農業の結びつき	くらし・環境部 廃棄物リサイクル課 文化・観光部 観光振興課 文化・観光部 交流促進課 経済産業部 農山村共生課
3	ファミリーサポートセンターの利用促進 オレンジリボン運動の推進	経済産業部 就業支援局 健康福祉部 こども家庭課
4	深沢川の全面改修、歩道及びアクセス道路の整備	交通基盤部 河川海岸整備課 交通基盤部 道路整備課 交通基盤部 道路保全課
5	文化や歴史によるまちおこし	文化・観光部 観光振興課 文化・観光部 文化政策課 教育委員会 文化財保護課
6	観光業、農業等における地域活性化 託児所に預ける経費の所得控除 1校1農園事業の全国発信 農業オーナー制度や観光農園の実施	文化・観光部 観光振興課 文化・観光部 交流促進課 健康福祉部 子育て支援課 経済産業部 農山村共生課 経済産業部 農業振興課
7	博物館の設置	文化・観光部 文化政策課
8	浜岡原子力発電所の安全性	危機管理部 原子力安全対策課
9	団塊の世代	

3 意見交換内容

出席者発言要旨	知事発言要旨
<p>新規就農者（ニューファーマー）の支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 3年前に県のニューファーマー支援事業の元で1年間、受入農家で研修し、現在 20 アールのビニールハウスで今年が3作目となるミニトマトを栽培している。 ・ ミニトマトの作業は、横芽を欠いたり、葉っぱを欠いたり、誘引したりする機能・管理作業と呼ばれるものと、実を採って、パックや段ボールに詰めるという収穫作業が主な仕事で、栽培で一番苦勞するのが、病気や害虫であり、今年は猛暑の影響もあり、初期に青枯れ病が出てしまった。 ・ 農業は常に最善の判断力が求められていることを痛感させられている。最も必要なのは、やはり経験や感覚であり、農業は一般的に農地を持っている農家が、代々その土地を受け継ぎ、仕事のやり方等を伝承していくというようなイメージがある。私のように基礎が全くないような素人が業として農業を営んでいくには、失敗を積み重ねていって判断力を養っていくということが一番良いのかなと思っている。 ・ 私たち伊豆の国市でミニトマトを始めたニューファーマーは、幸いにも近くに経験豊富で立派な指導者である経営農家がいるので、病気などが出ればすぐに相談できる状況にあり、仲間同士でお互いに情報交換をして助け合うこともでき非常に助かっている。 ・ これから新しく農業を始めたいとか始める人のためには、やはりこういった指導者がいて、県とか市、それから農協、地域の方々の協力を得られて初めてスタートできると思っている。現在、支援事業を行っていない地域でも、こういった環境が整えば、県の農業は、ますます発展していくのではないかと思っている。自分もさらに精進してミニトマトの生産に励んでいきたいと思うので、伊豆の国市も含めて、今後ともさまざまな面で御支援と御協力をお願いしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 石の上にも3年と言いますが、よく我慢された。一番大切なのは経験を積むこと、自分の感覚をしっかりと磨くことであり、相手は生き物ですから、土とか保水とか、あるいは温度管理だとか、こうしたことをしっかりと相手を見ながら、トマトを見ながら世話をしていくという態度は科学的である。非常に論理的というか、他の人に伝えることができるという面を持ってやられている。御本人はもちろん経験を積み重ねていないので、経験を積み重ねないが、その経験の積み重ねの仕方が、他の人に説明できる体系を持っているという印象を持ち、そこが良いと思う。 ・ 従来の経験のみとか、後は体で覚えるというのではなくて、きちっと説明することによって、他の人に伝えることができる、あるいは後続の人たちに対して、自分と同じ失敗をしないように伝えることができる。最後に「精進を重ねる」と言われたが、精進なんていう言葉が出てくるのは、さすがこの土地柄だなと思いき感心した。

出席者発言要旨	知事発言要旨
<p>2 観光と農業の結びつき</p> <ul style="list-style-type: none"> 伊豆の国市が推進している安全・安心・健康のまちづくり事業のバイオマスタウン推進委員会委員長として活動している。 伊豆の国市に合併してから委員会が開催され、食品残渣や田中山地区の牛糞、剪定枝などの生ごみ等を有効な堆肥にするために、3年ほどかけて、どのような方式が良いか検討を進めてきた。その結果が採択され、市で予算をとり場所を選定して先月「農土香」という堆肥の施設が落成した。 私は、家業の観光業と併せて茶栽培を行っており、有機栽培を行うために肥料について考えていたところ、ダイオキシンの関係で燃やせなくなった枯れ草を配布していたので、茶畑に敷く肥料としたが、枯れ草に入っている他のゴミがそのまま残ってしまったため、ちゃんと堆肥にしてから入れることを考えた。私が委員長に選ばれたのは、地元の業者と色々な研究をしながら堆肥づくりを進めてきたことが関係していると思う。また飲食店を営んでいて生ゴミなどをミンチにして餌としてニジマスの養殖を行っており、残ったものは茶畑の肥料にするということは前から行っていた。 「農土香」のシステムでは非常にすばらしい完熟の堆肥を作ることができるので、旅館で出る生ごみや田中山地区の牛糞等からできる堆肥を使うことで今後の地場の野菜、あるいはお米が大変良いものになっていくのではないかと、期待をしている。 農業推進委員会では、堆肥を使って、各種の栽培実験を何年も行っている。それを観光でどのように生かすか、3つの委員会が連携して観光、農業及びリサイクルを推進していくことが事業の趣旨である。農業の具体的な例としては、堆肥を使って無農薬で作ったお米は、炊いた後黄色くならないという特徴が栽培実験でも結果として出ている。 	<ul style="list-style-type: none"> 最近では第一次産業というと、後継者不足で高齢者になってどうするかという中で、35歳と50歳の、まさに食の都の一端を担われている二人の方に発言をいただいた。そこで出てきた食品残渣もちゃんと肥料にするという、まさに循環型の地域づくりをされていて、この方面でモデルになり得ると思う。 今まで一次産業に対して二次産業の方が進んでいる、二次産業よりも三次産業の方が進んでいるというイメージがあったが、そうではない。一次産業、例えば農業で見た場合に、お隣の中国、あるいは東南アジア、あるいはアフリカ、ラテンアメリカ、中南米、こうしたところと比べたら、こちらは理想郷であり、芸術の域に達していると思える。 これまでは経験的にそうだったが、今は「農土香」のように科学的にできる。科学と技術と経験といったものが三位一体になって、今、この風土の中で新しい飛躍の装置が、人においても、物においてもできつつあるということで、大変頼もしく思う。これからこの伊豆の国市における農業が日本の全体のモデルになると思う。

出席者発言要旨	知事発言要旨
<ul style="list-style-type: none"> 「農土香」は、1日最大5トンの処理能力があり、その量が生ごみから堆肥に変わるといのは大変大きな意味があると思っている。それらを生かした観光と農業の結びつきというのは、今後大きなテーマになると思うので、その点で伊豆の国市が推進する観光業がさらに進めば良いと思っている。 	
<p>3 ファミリーサポートセンターの利用促進、オレンジリボン運動の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> 4月からスタートしたファミリーサポートセンターで「まかせて会員」をしている。センターの中には子どもを預かって欲しい「お願い会員」と、子どもを預かる側の「まかせて会員」の二つがあり、会員の中には子どもを預かってもらいたい若いお母さんや、子育てが終わった方、保育の仕事も退職した方などの年配の方まで、さまざまな方がいる。 活動内容は、まだ始まったばかりでなかなか事例も無いが、私の場合は主に幼稚園への送り迎えや学童保育へのお迎えをしている。働いているお母さんが、例えば仕事が夜8時までかかってしまうというときには、夕食からお風呂の世話、ときには宿題をすることもある。私の家にも小学4年生と小学1年生の子どもがいるので、一緒になって遊んでくれている姿を見ると、「ああ、何かよかったな」と思う。 子育てをされていて、やっぱり若いお母さんは、美容院にも行きたいとか、色々なことがあると思うので、そういうときにも本当に気軽に活用してほしいと思う。育児で色々なことを我慢するのではなくて、サポートセンターのようなどころを利用し、お母さんがいつもにこにこ笑って元気があれば、子どもたちも伸び伸びと元気に育っていくし、素直な子どもが育つと思うので、預けるということに抵抗を感じないで、幅広く色々な方に使って欲しい。 	<ul style="list-style-type: none"> このファミリーサポートセンターは、今までよくワーク・アンド・ライフ・バランスという言い方で、仕事と家庭との両立がこれからの課題だと言われてきたが、それも含んだ、働いていないお母さんのこともよく視野に入れたお話だったと思う。ライフを、生活をいかに豊かに、子育てを含めてしていくかという観点だったので、非常に、そうか、気がつかなかったことがあるなと思い、感銘を受けた。 合計特殊出生率は伊豆の国市は1.41で、国は1.37である。静岡県全体としては1.44で、伊豆の国市は、全国平均より高いとはいえ、静岡県から見るとやや低い状況である。女性の方たちが20歳前後から50歳前後までの間に何人子どもを産むかということで、2.07人産んでいないと人口は減っていくという中で、地域の子どもは地域で、子育てを経験したことのある方が、安心してお子さんを預かってくださるといところがあると、子どもを育てやすい、あるいは産みやすいと。産んでよし、育ててよしになり得ることなので、このファミリーサポートセンターは大きく育たねばならない。 地域の子どもを地域で一緒に育てていく、そして子育てを経験したことのある方々は、若いお母さんに対していろいろなノウハウや経験で生まれた、獲得した知識を伝えることができるので、一人で苦しまないで、こういう

出席者発言要旨	知事発言要旨
<ul style="list-style-type: none"> ・ 私自身、子どもを産んで幼稚園に入れたときに、下の子どもがまだ生まれたばかりで保育所に預けることもできず、自分の両親も働いていたので、すごく悩んだ。ベビーシッターをお願いしたが、値段的にも高く、大変な思いもしてきたので、育児をしているお母さんたちが無理なく子育てができるお手伝いをこれからもしていきたいと思う。 ・ 私はもう一つオレンジリボン運動という活動を行っている。これは 2008 年の 9 月にできたオレンジプロジェクトの中の運動である。よく蓮舫大臣が議員バッチの下にオレンジリボンをしているが、これは子どもの虐待防止の象徴としてオレンジリボンを広げていこうという市民活動の一つで、知らない方がまだまだいっぱいいる。このリボンを見て、例えば悩んでいる方や本当に悲しい思いをしている子どもたちが助けてと言って来られるような環境づくりをするためにも、オレンジリボンという存在を多くの方に知ってほしいと思う。 	<p>サポートセンターがあれば、預けることができる。何も働いていなくてもちょっと美容院に行きたい、ちょっと用事があるときに預けることができる。しかも安心して子どもを見てもらえるということは、本当に素晴らしいことだと思う。ぜひこれは育ててください。そして 1.41 が 1.50 あるいは 1.60 というふうに伸びていくようになっていただきたいという意味でも、活躍に期待している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ オレンジリボンのことは今まで知らなかった。子どもの虐待は驚くべき形で増えている。県でも担当者はきりきり舞いの状況である。悲鳴を上げている子どもがリボンをつけている人のところに行けば助けてくれる、どうしたらいいかがわかる。悩んでいる人、あるいは子どもにもわかるように、オレンジリボンという形で、温かい大人がここにいる、お姉さんがいる、おばさんがいるということを知らせる。このようにすることはとても大事である。
<p>4 深沢川の全面改修、歩道及びアクセス道路の整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 伊豆の国市建設業協会は、「安心・安全で活力あるまちづくりに貢献する」を旗印に活動する市内の建設業者で組織する協会で、若手の会は、協会に所属している会社の 20 代から 40 代前半の若手経営者及び技術者で構成し、技術力と経営力の向上と、建設産業界の健全な発展と地域社会の活性化に貢献するため、会員の資質の向上と連携強化を目的としている。 ・ 地域貢献活動として、観客 3 万人を集める大仁夏祭り花火大会の打ち上げ場の草刈り整備、江間地区で行われたどろんこフェスタの会場準備、狩野川川遊び大会の会場準備や駐車場整備など、町を元気にする活動の縁の下の力持ちとして汗を流している。夏には毎年市内各所で草刈りや清掃活動を 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 若手の建設業界の代表として、ボランティア活動を本当に一生懸命されているという姿が、話の全体にあふれており、この若手の会で歴史を学びながらまちをよくしていこうという姿勢が良い。 ・ まずこの大地を知ろう、この土地に刻まれた歴史を通して、自分たちが体でわかることを通して世界を知っていこうとされているのが良いと思う。必ず自分たちの地域に対する自信になり、人に説明できるから生きた知識となり、これが地域の誇りを作っていくのだと思う。

出席者発言要旨	知事発言要旨
<p>行っており、平成 20 年 1 月には、災害対応と奉仕活動について伊豆の国市から善行表彰を受けている。</p> <ul style="list-style-type: none"> 今年の奉仕作業で深沢川の護岸の草刈りを狩野川合流点より上流に 500 メートルほど行ったが、気になるところを見つけた。深沢川は市内でも最も急流な河川であるが、下流部の橋が低く、特に伊豆箱根鉄道の鉄橋が最近頻繁に起こるゲリラ豪雨に襲われたら、流木等が引っ掛かり流されてしまうのではないかと心配である。伊豆箱根鉄道は田方の住民の生活を支えている。有事の際でも安心していただけるように、深沢川の全面改修をお願いしたい。 若手の会では去年から「住みたいまち・訪れたいまちを考える懇談会」を商工会青年部や市職員も参加し行っている。昨年の懇談会では近年の観光客の減少について取り上げ、自分たちにできることはないかといういろいろ考え、まちをきれいにしようとクリーンアップ作戦を実行することにした。昨年は「伊豆の国市の歴史散策とお国の大掃除」と題して、歴史ガイドの説明を受けながら、反射炉、蛭ヶ小島、葦山城、江川邸と回り、ごみ拾いを行った。 私たち市民が頼朝公の旗揚げ以来 800 年に及ぶ我がまちの歴史を知ること、自分のまちに誇りを持つことが住民力の強化につながり、また人に伝えられるようになることが、観光力の強化につながると考えている。自分たちにできることは工夫しながら続けていくが、市内に存在する観光地を周遊するための歩道の整備やアクセス道路は、まだまだ整備が遅れている。ぜひ地域の活性化の面からも整備をお願いしたい。 浮橋地区には、人口減少、高齢化の進む地域の活性化を思う団体がある。子どもの数も急速に減り、今年 3 月には地域の小学校も閉校となり、10 年後、20 年後の不安材料の多い地域だが、春 	<ul style="list-style-type: none"> ごみを拾うと言われる。森と水の里をつくりたいとおっしゃる。つまりきれいにしていこうということである。森は水をつくる。水が汚れているということは、実は山がだめということ。森は水をつくってくれる。その水で我々は生活ができ、あるいは農作物をつくることができる。それをきれいにしていこう、美しくつくっていこうということである。 この美しいというのは言葉は要りません、見ればわかる。だから中国人が来ようが、韓国人が来ようが、あるいはどの世界の人たちが来ようが、見ればわかる。美しいというのは、人間に神様がくださった贈り物である。 そのような地域をつくっていく小さな、しかし大きな役割を持ったモデルになると思う。

出席者発言要旨	知事発言要旨
<p>から秋にかけて多くの方が市民の森公園に訪れる。現在、この公園に行くまでの県道の道幅が狭く、訪れる人や地域の人たちも安全に走行することができない。みんなが安全に公園に行くことができるよう、県道の改良をお願いしたい。訪れる人が増えることで、地域に見合った産業が生まれ、地域の活性化につながると考えている。</p> <ul style="list-style-type: none"> 山間地の過疎化が進むと、自然と農地や山林の荒廃も進む。それを抑えるためには、この地域に暮らす人たちの努力と行政の力が必要だと思う。 	
<p>5 文化や歴史によるまちおこし</p> <ul style="list-style-type: none"> 若女将としてお客様と接していると、伊豆にいらっしゃるお客様の旅の目的とかニーズが多様化しているなど感じる。昨今は家族連れやカップル、少人数の方や一人旅の方も多く、おいしいものを食べて、温泉にのんびり浸かること自体が目的という方も増えてきた。昔、伊豆長岡温泉は「夜が楽しい伊豆長岡温泉」などというキャッチフレーズがあったそうで、社員旅行など団体で来て、宴会をして観光バスでまた施設を回って帰っていかれるという方が多かったが、今は、色々なニーズがあり、従来のような観光施設以外のところに行きたいと希望される方が多くいる。 実は伊豆の国市には素晴らしい能文化や史跡があり、能の題材にもなっているような史跡がたくさんある。能は日本が誇る伝統文化の一つで、この地では江戸時代のころより金山奉行の大久保長安が能の演目を歌舞伎化した「三番叟」が広まった。地元宿泊施設でも能楽鑑賞会やワークショップを始め、地元の民話に基づく創作子ども能、プロ演者による能の公演など様々な催しを行っており、凜とした能文化に触れ、しっとり温泉に浸かる、ぜひそのようなひとときを過ごしていただきたいと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> 能はユネスコによって無形文化遺産として宣言されるなど世界的に認められている舞台芸術の一つであり伊豆の国市が能の故郷というアイデンティティ（独自性）を持っているのは素晴らしい。能という芸術をあわせて観光の一つのアトラクションとして打ち出すことに賛成する。 茶道は羽織袴できっちりと着物を着て、すべての動作が全部規則づくめで素晴らしい。それ自体が非常にきれいでそういう型を持っているが、新しい型をつくるために、静岡県は日本茶インストラクターというのをつくった。だからこの能も、ここで創作能を子どもからやっているということが良いと思う。子どもからわかっていけば、大人になっても能文化がわかる。

出席者発言要旨	知事発言要旨
<ul style="list-style-type: none"> ・ 文化の日には、大仁神社で子ども創作能が上演され、市内の保育園児から小中学生が参加する 11 年も続く舞台がある。こういった文化があることを、ぜひ知っていただきたい。 ・ 今年は源頼朝が葦山で挙兵した事件を扱った「伊豆の頼朝」という演目が演じられる。この舞台に出てくる頼朝の流されていた蛭ヶ小島や、願成就院などの歴史をたどる旅も、最近お客様の希望のあるおもしろいものである。また、葦山の反射炉や北条政子の産湯の井戸を始め、まだ市外の人には余り知られていない良い史跡もたくさんある。この地に根付いた文化や歴史を大切に守っていくためにも、住みたいまち・訪れたいまちになりたいと思うので、それを生かして集客することや、観光客の方々に来て満足いただけたらと考えている。 ・ 最近ではそういった場所をウォーキングとかサイクリングで回りたいという声もよくいただくので、安心して温泉街からまちに歩いていける道や、サイクリングロードの整備も必要ではないかと思っている。建設業界の方と協力して、良いまちをつくっていければと思う。 	
<p>6 観光業、農業等における地域活性化 託児所に預ける経費の所得控除 1校1農園事業の全国発信 農業オーナー制度や観光農園の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 仕事のために託児所に預ける経費を個人の所得控除として差し引けるように、静岡県から発信してもらいたい。国政の問題になるので、すぐには難しいと思うが、他の都道府県に先駆けて静岡県から発信したら、子育てや少子化問題の大きな解決に一步踏み出すことではないかと思っている。 ・ 伊豆の現況は疲弊し、今が一番ひどい危機ではないかと感じている。最盛期には 60 軒以上あった旅館も今では 36 軒になり、リーマンショックからこの 2 年で 15 軒以上の旅館、ホテル施設の経営者が変わったり、廃業・倒産し 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 伊豆半島は危機だと言われたが、この危機はチャンスに変えられる。なぜなら伊豆半島は、潜在的な条件はずばらしいものがある。後は伸びるだけ。伸びるときには、今までより、一皮むけたものになっていけると思っている。 ・ これからの伊豆半島の観光は待ってはいはだめ。攻める観光をやっていただきたい。自らが観光客としてどこかに行く。どこが流行っているか。長野の小布施や、由布院が別府を抜いたのはどうしてか。交通の便が悪いのに何で流行っているか知るためには見にいかなくてはならない。女将さん達が思い切って休暇を取り、一緒に寝食を共にして出掛けノウハウを盗んでくるが必要。一人ではだめ。色々な

たりして温泉街が様変わりしている。伊豆の代表的産業である観光業は大きな崖っぷちに来ている。繁栄に向かうことができるかは、企業の努力と政治の力の采配にある。

- ・ 農業も今大きな岐路に立たされている。後継者の問題があり農業を引き継ぐ農家が激減して、膨大な耕作放棄地を生んでいる。耕作放棄地は景観を崩すだけでなく、雑草の種の飛散、害虫の繁殖が交通の妨げになって事故を引き起こし、地域社会に大きな見えない影を落としている。耕作放棄地の解消は、日本の農業の再生につながる可能性を含んでいる。
- ・ どろんこの会と江間子供会で1校1農園に応募し、県の中で4校のうち1校に選ばれた。1校1農園を静岡県の全校で行えば本当にすばらしい。静岡県から全国の学校で行えるような形で発信して欲しい。
- ・ 建設土木業は、民間の発注が減り、大変な状況にある。行政の発注も税金の減少で当然以前より減ってきている。建設土木業者が元気であることが、県の元気度をあらわすバロメーターでもある。農業が生き、観光が輝き、建設土木業者が元気な県をつくるにはどうしたらいいか。
- ・ 現状の法律では、農業オーナー制度や観光農園などを企画しても農業資格がないとできず、法律と現況にギャップがある。県政で特区申請、または緩和政策で恒久的にできる制度に改革していただく努力をしていただきたい。
- ・ ジオパーク構想の語り部、自然体験案内人育成への助成、河川などの観光使用の整備、お祭りなど地域活性化に関する道路規制の緩和、これらを県政で御検討いただきたい。

ことを話すことにより情報が共有され、力になるので他を見に行く必要がある。

- ・ 農業のオーナー制度も貸したら良い、オーナーになってもらえば良いと思っているのはだめ。東京では、特にお母さんが自分の子どもに、土に、自然に親しませないと危機だと思っているので山村留学をさせる。そうすると子どもと一緒に体験したい。泥だらけになるので着替えて、収穫した後はシャワーを浴びて、きれいな格好をして帰る。おしゃれして農業を体験したいはず。手袋も日差しよけの帽子、長靴も色模様できれいで農業をやる時代が来ている。これを農ガール、農ギャルとも言うそうだが、農業をやる場合は、しゃれた格好で最先端のところに行くという形にしてみれば良いと思う。
- ・ そのためにどうすれば良いか。例えば東京の市民農園はあつという間に一杯になる。そこは自動車や電車に来て、そこで着替える。色とりどりの格好をして、農作業の後は身だしなみを整えて帰る。こちらは本当にきれいな景観の中でそういうことができるとなれば、もっと魅力的である。オーナーになってもらえれば良いというのではなく、相手の持っているものよりも、もっと良いものをこちらが提供すれば良い。
- ・ これは非常にハイカラな流行になり、続くと思う。なぜなら工夫をすれば、より良いものができるようになり、子どもが「僕、お父さん、農業をやりたい」と言うようになる。だから最初は真似事でいい。その真似事の中から本物をどう育てるかというときに、本当に良いものを味わわせる、体験させることが大事。ここには最高のレベルのものがある。
- ・ 1校1農園は、1校1反でいいと思う。1反あれば相当のことができる。畑であれば、ここでは10種ぐらい作れるのではないか。きれいなバラやサツマイモ、トマトなど色々なものを作らせてみる。そのようにして花も実もあるような形にできる。1村1品とい

出席者発言要旨	知事発言要旨
	<p>う言葉があるが、静岡県は219品目、農産物だけで167品目あり日本一を誇っている。100種と言わないが、10種ぐらい好きなものを作ることによって、どろんこになることに平気になり、その喜びを感じるようになる。</p>
<p>7 博物館の設置</p> <ul style="list-style-type: none"> 伊豆の国市は非常に歴史に恵まれている。江川文庫の調査も終わり、大量の重要文化財級のものまで発見されたが、展示施設が無い。旧菰山町に郷土資料館があるが、常勤の職員も置いておらず、収蔵庫プラス展示場という感じである。本格的な博物館でもある展示施設について、市も頑張っているが、これはどうしても県の支援がなければできないと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> 江川文庫は調査が終わり目録もでき、今後は文化庁の指定を受ける段階になる。江川文庫の重要性を関係者に知ってもらい、国の幕末明治維新時の事情を江川文庫を通して知ることができるということは、単に伊豆の国市や県だけの問題ではなく、国全体の宝物であるとしていくことが次の課題になると思っている。整理が終わった文書をどう評価するのか。評価に応じたふさわしい研究、展示ができるようなものを持たなければならないという機運を盛り上げていく必要があると思っている。すぐに約束はできないが、すごいものだということは、研究をした方々の共通認識になっているので、できるようになればと思っている。
<p>8 浜岡原子力発電所の安全性</p> <ul style="list-style-type: none"> 農業の話がたくさん出たが、農業と連携した地域分散型の再生可能エネルギー事業ができないか。 静岡県は東海地震の震源域真上に浜岡原子力発電所を抱えている。年末にもウラン燃料にプルトニウムを混ぜたモックス燃料というものを使うプルサーマル発電も4号機で始められようとしているそうである。万が一にも大地が放射能で汚染されるようなことになると、農業も環境もできたものではなく、風評被害は新潟などの例を見ると大変である。 県民の不安も大きく、今年の6月に421団体の県内賛同団体が署名を持ち、10団体が知事宛てに東海地震の前に浜岡原子力発電所を安全に止める 	<ul style="list-style-type: none"> 原子力エネルギーは必要悪だという認識を持っている。原発は、危険であるから、危険なときにどうすることが一番適切かは、最高の頭脳と技術者と教育が要る。 あなたが言われるように、また必要悪だということであれば、自然エネルギーが一番良い。伊豆半島においては、自然エネルギーを核とする方法があるはずだと思っている。原発が危険だからすぐやめさせろという意見や多数の署名など全国各地から来ているので心配は承知している。安全かどうかということについては専門家に見てもらい、その専門家に要請する形にしたい。

出席者発言要旨	知事発言要旨
<p>よう要請を出しているそうである。これが果たして知事の手元に届いているのかどうか。意見交換をしたいという要望も出しているようだ。知事の耳に入っていないようなら、この場で返事を聞きたい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 浜岡原発を教育現場、教育施設としても捉えている。問題が起きた時にどのように対処するかも含め、あらゆる質問に答えられるような施設にしなければならない。一番危険なところにある原発が安全であれば、他でも安全に稼働できるだけの技術と知識があるということになり、世界のモデルになる。
<p>9 団塊の世代</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 堺屋太一氏が団塊の世代は持っているものをもう1回出してくれ、それで日本を救ってくれという話をしているが、私はそれに大賛成である。 ・ 団塊の世代は、お金もかなりあり、実行力も、人間のリレーション（関係、つながり）もあるので、そういった人たちが自分に投資し、その投資が地域に役に立っていき、もう1回日本を盛り上げることをぜひやって欲しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 団塊の世代はこうすべきだと言っても、100万人以上の人たちが同じ気持ちになるのは難しいが、言われるような気持ちはよくわかる。 ・ 若い人たちの希望や夢を生かすために何を残すかということを考えねばならない。私は自分に投資をして欲しいのは20歳代から30歳代前半ぐらいまでと思っている。自分に投資をするというのは鍛えろということ。まだ不十分だから鍛えろという意味である。 ・ 地域の中で安心してこれを公共のため、あるいは子ども、孫のために使うという形での投資というのは、工夫すればできるのではないか。生き方として、60歳を過ぎれば若い人のために何かをするという気持ちは変わらないのではないかと思う。 <p>まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 今日には農業、それから子育て、地域、観光、芸術と多岐にわたる話をいただいた。これからの県政に生かしていきたい。 ・ この地域は色々なモデルになり得るという強い感触を得た。それぞれのリーダーが仕事の中で、今日の話を生かしてもらい、一緒にこの地域と県とが協力をして形にしたいと思っている。 ・ 差し当たり農業はモデルになり得る。子育ては出生率が県全体の1.44を目指して欲しい。観光については攻めていくようにこちらからもお願いしたい。お互いに汗をかいていきたいと思う。